

昨年六月、同窓会館二階の未整理の書類を整理していたとき、週刊誌大に折りたたまれた習字紙を見つけた。広げてみる

本語（秋田弁）を身につけたという。等観も瞬く間にチベット語を習得したという点で共に優れた語学力を持っていたといえる。一年後の

ット仏教の最高学位ゲシェー（大僧正）の称号も許され、惜しまれて帰国する。その際、門外不出のデルゲ版のチベット大蔵經全巻など、大量の貴重な仏典・文献をいただき、それを持ち帰っている。

ち帰った多数の貴重な書籍が寄贈されていて感謝しているとおっしゃった。遠くの方々のご存知ということに驚くと共に嬉しかった。しかし、考えてみれば多田等観については「ブリタニカ国際百科事典」にも紹介されているので、むしろ『先蹤録』を読む以前に意識していなかった自分が無知ではあったのだが。

ようか。」ということらしい。井川中学校にも等観の書があり、体育館には「青雲大志」の扁額が掲げられている。秋高に残されたこの漢詩に多田等観さん、は何を託したかったのだろうか。

お宝、発見

同窓会館内から

状の紙に五言絶句の漢詩が書かれ、等観と署名落款されていた。

本校百年史に、昭和二十九年五月、多田等観（明治二十三年（昭和十二年）が来校し講演したと記してある。どうやらそのとき残されたものと思われる。

多田等観の「五言絶句」



寺 藏

ダライラマ十三世の名前の一部をいただく榮譽に浴している。

ベツト学研究センターで後進の育成にあたった。」

翌年再びインドを訪れ、外国人のチベット入りを警戒していた宗主国イギリス官憲の目を潜り、チベット僧に姿を変え、単身裸足で六千裡を超えるヒマラヤの峠を越え、聖地ラサ入りした。約十年ボタ

さて、筆者はここ十年ほど親しくさせていただいている方々に父・妻を加えた八名ほどで、年に一度東北の夏山に登っている。今年も磐梯山であった。夕食時の話で同行の車谷長吉氏（直木賞作家）から大谷法主の話が出たので、等観の書の話をしたところ名前を知っているという。同席の野家啓一氏（東北大副学

雲従太平来 又向太平去
借問山中人 雲今立何處

『明治四十三年本校の前身、秋田中学を卒業した多田等観は、土崎のお寺（西船寺）で生まれ育った。二十歳頃、京都の本山（西本願寺）で、チベットから来た高僧と従者二人の世話をした。彼らは完璧な日語を教えた。

ラ宮に近いセラ寺で学び、ダライラマ十三世の外交相談役的なこともし、大蔵經の編集にも携わった。そして、チベ

と書かれていて、意味は「雲が太平（山）の方からやってきて、また太平（山）の方へ去っていった。ちょっとお聞きします山中の人よ。雲は今どこにわき立っているのですか。」ということらしい。

同窓会館で発見の書には、

南浦医院
院長 南浦光昭 (昭和49年卒)
〒010-0023 秋田市橋山本町1-32
TEL 018-834-1097

医療法人 真和会
真崎耳鼻咽喉科医院
院長 真崎雅和 (昭和49年卒)
http://www.masakient.jp
〒011-0946 秋田市土崎港中央6-8-3
TEL 018-845-0234
FAX 018-847-1321
masaki@medical.email.ne.jp

代表取締役社長
大島千明 (昭和49年卒)
稲庭うどん・そうめん製造
株式会社 無限堂

事務局長 寺田和夫 (S41卒) 記